

## 意味と記憶

関西学院大学 賀 集 寛

心理学における記憶の実験的研究は、1885年のEbbinghausの "Über das Gedächtnis" という者によってはじまった。彼は、記憶材料として言語を用いるにあたり、日常単語では個人により、またことば自体によって、その性質を異にしているので、客観的条件の斉一化には不向きであるとして、無意味音節を考案し使用した。このことは、記憶研究はことばの意味を排除してスタートしたことを意味する。

ところで、無意味音節といっても意味ある語を思い浮かべやすいのもあれば、そうでないものもある。そこで、無意味音節の連想価や有意味度をしらべ、これによって記憶材料を斉一化する試みが普及した。かかる試みは、しかしながら、意味を記憶の一つの要因としてとりあげたものではなく、Ebbinghausの伝統をよりリファインしたものというべきである。このような傾向は1950年頃まで続いた。この間、記憶研究は、理論的側面においても、学習心理学における条件反応もしくはS-R理論の導入によって大きく進展した。そして、記憶という名称よりも言語学習 (Verbal learning) という用語の方がより一般的になった。つまり、言語刺激と言語反応との実験室的な新しい連合の研究という色彩がつよくなった。しかし、かかる研究では、生活体内の記憶の過程や記憶の構造についての解明はブラック・ボックスのまま残された。

このような動きのなかにあって、Bartlett (1932) はEbbinghaus流の機械的な連合による記憶研究を批判し、日常の具体的な記憶現象を扱うべきだと主張し、今日にも大きな影響を及ぼしている。だが、文化人類学、言語学、コンピューター科学等の隣接科学の影響によって、記憶研究の流れが大きく変化するきっかけが作られた。Osgood (1952) の意味微分法、Deese (1962) の連想的意味の研究にみられるように、心理学においても意味の問題に注意が向けられるようになった。これと相前後して、記憶材料の意味特性が記憶 (言語学習) の重要な要因として積極的にとりあげられるに至った。(Noble, 1952)

この傾向は加速度的に進んだが、これに大きく寄与したのは、Chomskyの生成変形文法を中心とする新しい言語学と、コンピューターによる情報処理の考え方であろう。1960年代に入って、これまでいわゆるブラック・ボックスのままだった記憶過程や、記憶と言語構造との関係等に関心が向けられるようになった。これに伴って、言語学習に代って記憶 (memory) という語が復活して来たり、

研究内容も多彩をきわめている。これらのうちにあつて、記憶過程としては、1分以内という短期の記憶と、それ以後の長期記憶ではその特質を異にするということが研究者間のコンセンサスとなった。また、覚える過程（貯蔵）と想い出す過程（検索）に分けて記憶を考えるという試みも一般化した。さらに、長期記憶においては、意味特質といった言語構造の影響の大であることが判明した。すなわち、記憶材料を、何らかの意味カテゴリーや体系によって体制化すると記憶が容易になるのである。さらにまた、日常生活で貯蔵された長期記憶内の意味体系を、命題論理や格文法等によってモデル化してとらえ、その心理学的検証といった試みもなされている。

かくて、記憶研究は、実験室的な研究はもとより、日常たくわえている記憶の内容や構造にまで解明が進んだ。そこでは、記憶材料はいうまでもなく、生きた言語、意味のある言語として扱われているのである。

以上を要するに、記憶の実験的研究は、かつては、ことばの意味を邪魔物扱いにしてスタートしたが、今や、意味は主役としてはなばなく登場して来ているといふことができる。

（本稿は西日本言語研究会第4回大会における同じ題の講演の要約である。）